

世界を変えたクルマ、 プリウス。

その歴史的偉業をたどる、英雄の物語。



21世紀を目前に、クルマが突きつけられた「問い」。

1990年代、世界は地球温暖化への危機感を強めていた。化石燃料への依存、そしてそれによるCO2排出は、自動車産業にとって持続不可能な未来を示唆していた。

特に1997年の「京都議定書」採択は、自動車メーカーに環境性能の抜本的な改善という重い課題を突きつけた。

世界は、この問題を解決する新しいヒーローの登場を待っていた。

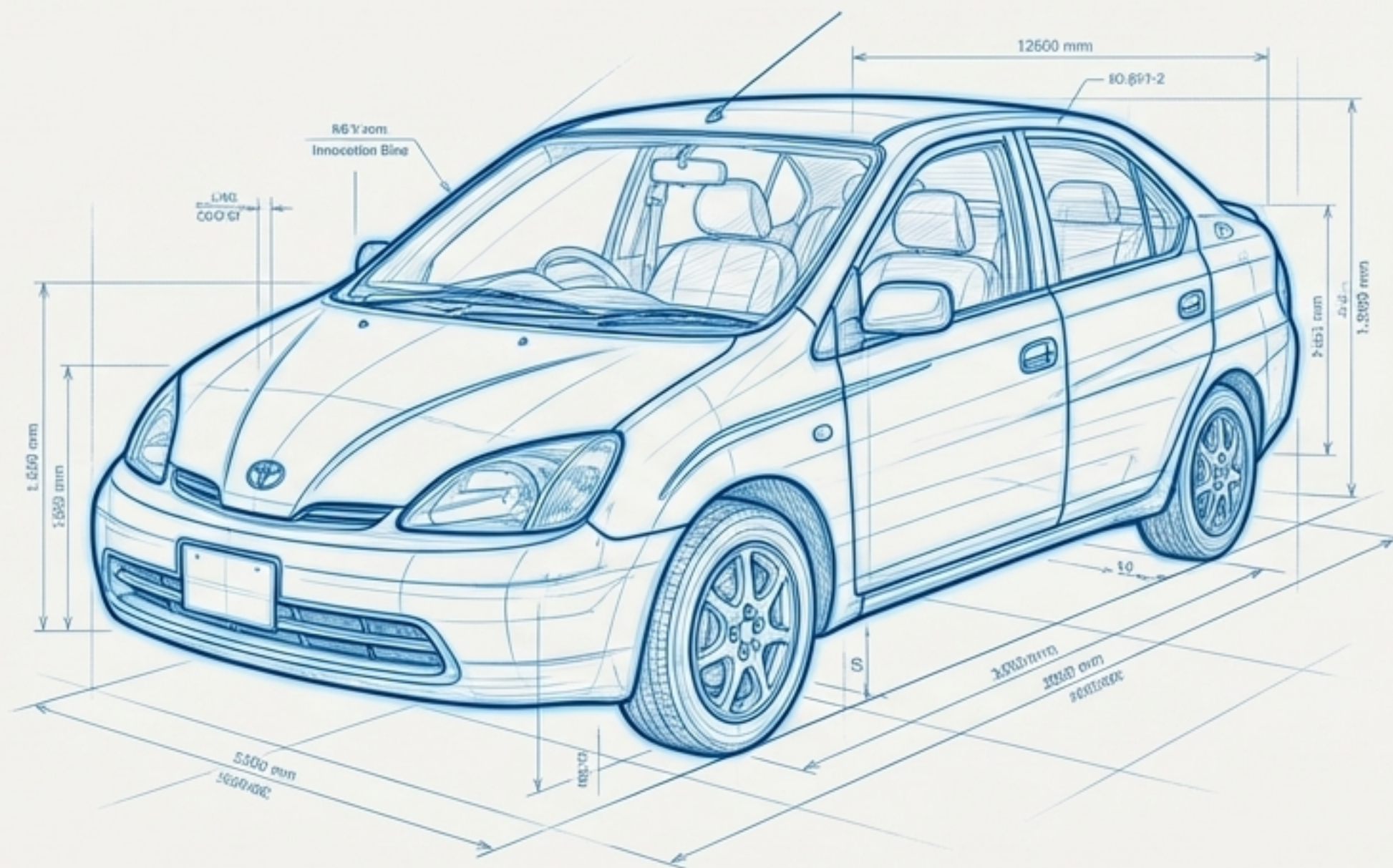


「21世紀のクルマを創る」—— トヨタの無謀とも思える挑戦。

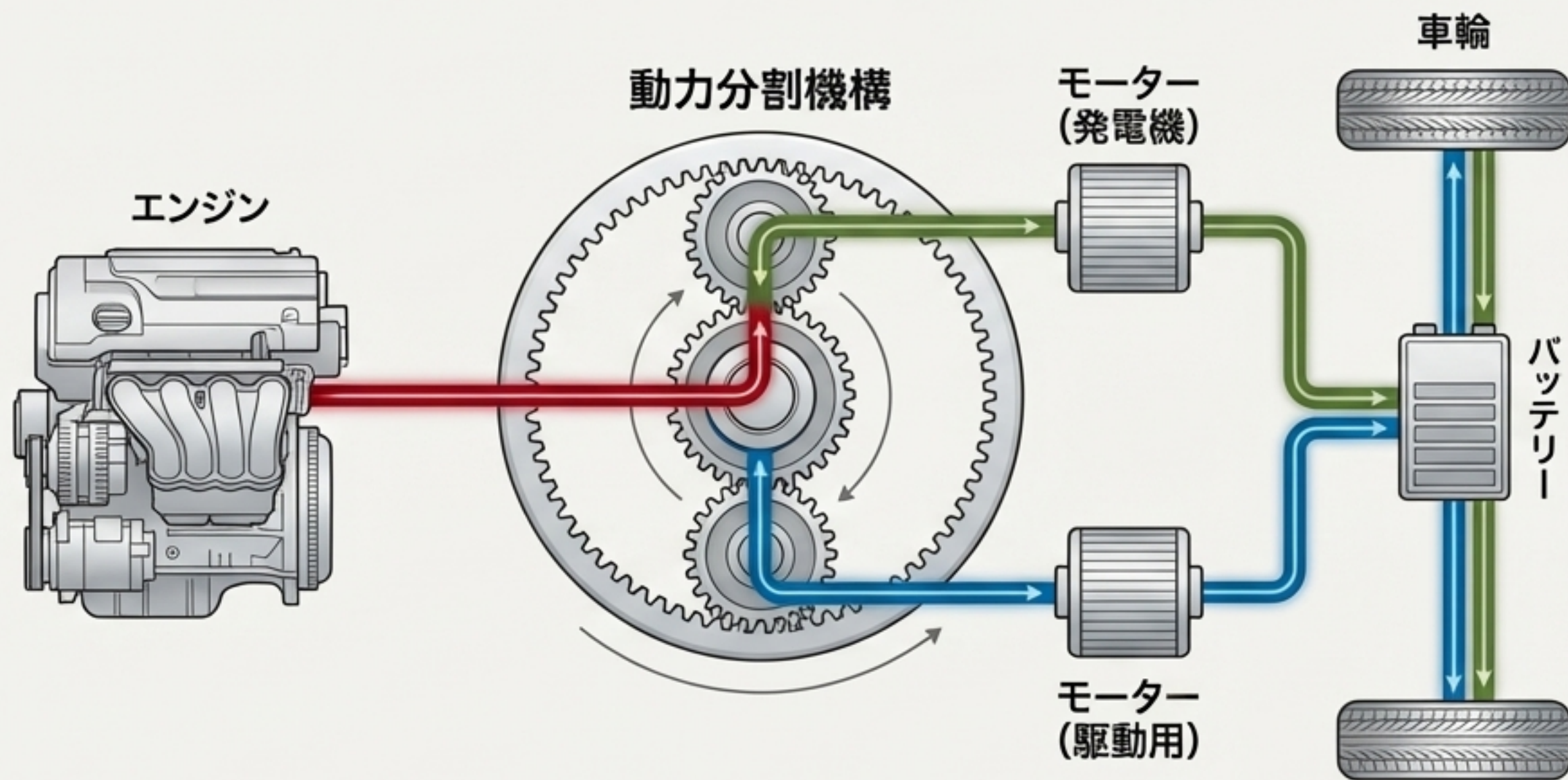
1993年、トヨタは社内で「G21プロジェクト」を始動。その使命は「21世紀にふさわしいクルマ」を創造すること。

掲げられた目標は、当時のカローラに対して
「燃費2倍」という、常識を超えたものだった。

この挑戦の答えとして選ばれたのがハイブリッド技術。ラテン語で「～に先駆けて」を意味する「PRIUS」という名が、その使命を象徴していた。



エンジンとモーターの「いいとこ取り」。 世界が驚愕した発明。



プリウスの心臓部は、駆動用と発電用の2つのモーターを持つ「トヨタ・ハイブリッド・システム(THS)」。

その核心は、遊星ギアを用いた「**動力分割機構**」。これにより、エンジンを走行と発電に同時に、かつ最適に使うという画期的なシリーズ・パラレル方式を実現。

単純なアシストではなく、状況に応じてエンジンを完全に停止させてモーターだけで走る(EV走行)ことも可能。これにより圧倒的な低燃費を達成した。



— 茨の道の始まり。

1997年12月、世界初の量産ハイブリッドカー、初代プリウスが誕生。

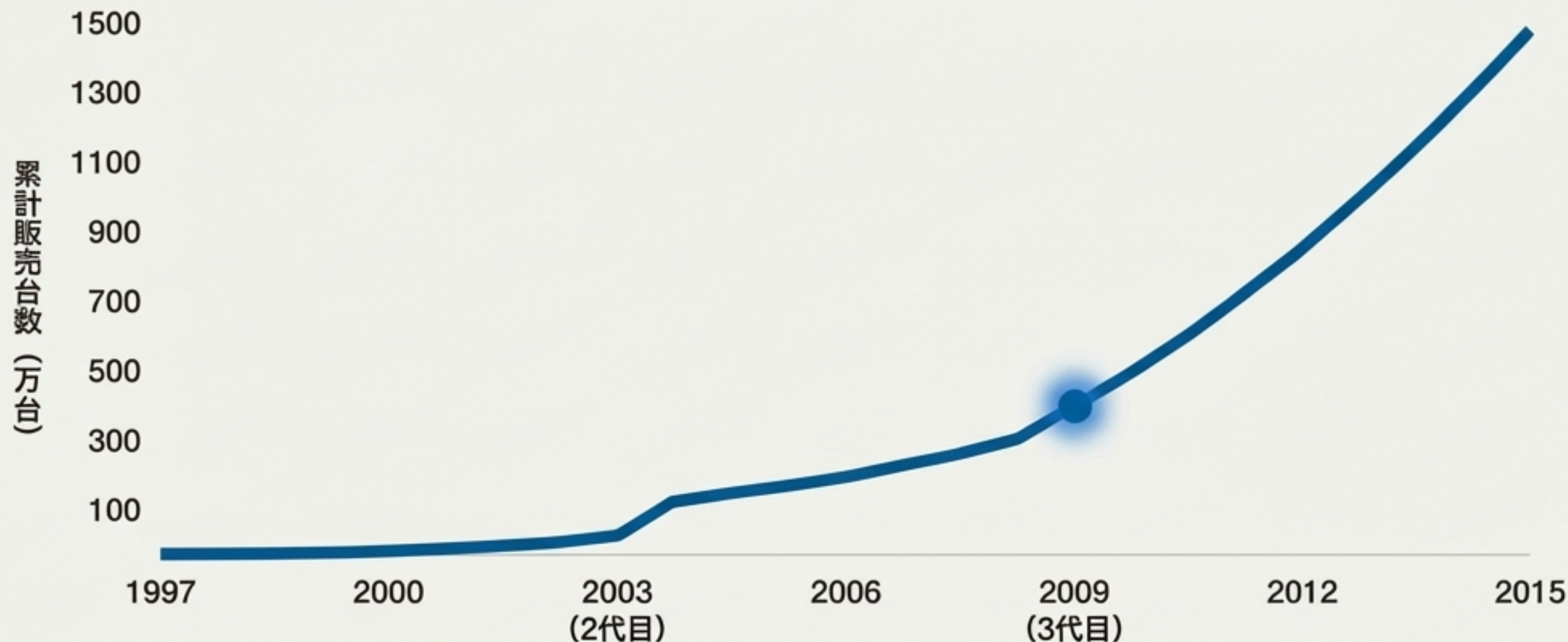
価格は215万円。しかし、その製造コストは非常に高く、「**売れば売るほど赤字が出る**」状態だった。これは市場を制圧し、エコカーの基準となるための「市場浸透価格戦略」だった。

未成熟な技術ゆえに初期トラブルも少なくなかったが、トヨタは駆動用バッテリーの永久保証など、手厚いユーザーケアで信頼を築いた。

「21世紀に、間にあいました」

時代が、追いついた。社会現象となった2代目、3代目。

プリウスファミリー 世界累計販売台数



2003年の2代目、2009年の3代目でプリウスは飛躍的に進化。燃費性能と走行性能が大幅に向上し、市場の評価が劇的に高まった。ハイブリッド専用コンパクトカー「アクア」やワゴンタイプの「プリウスα」も登場し、「プリウスファミリー」として市場を席巻。かつてのニッチなエコカーは、日本の乗用車市場を支配する絶対的な存在へと変貌を遂げた。

一台のクルマが、どれだけ地球を救えるか。 その答えが、ここにある。

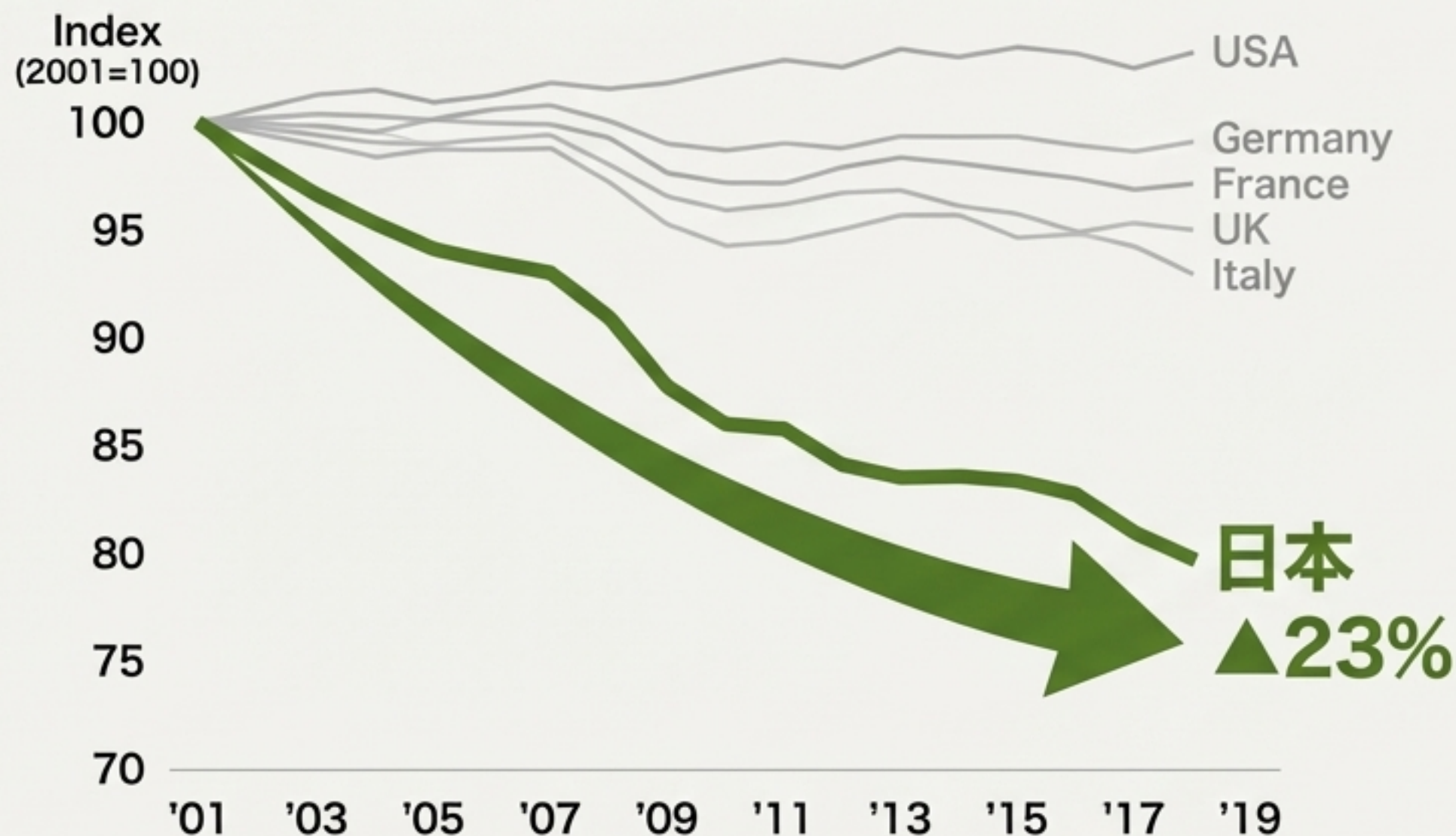
普及こそが環境への貢献。

2017年時点で、トヨタのハイブリッド車は
世界で年間約**580万トン**のCO2排出を
抑制。

日本の自動車セクターにおけるCO2削減実
績は突出している。2001年から2019年
にかけて**23%削減**という成果は、主にハイ
ブリッド車の普及によるものであり、他の
先進国を大きく引き離している。

これは、プリウスが日本、そして世界の環
境を変えた動かぬ証拠である。

自動車CO2排出量 国際比較 (2001年=100)

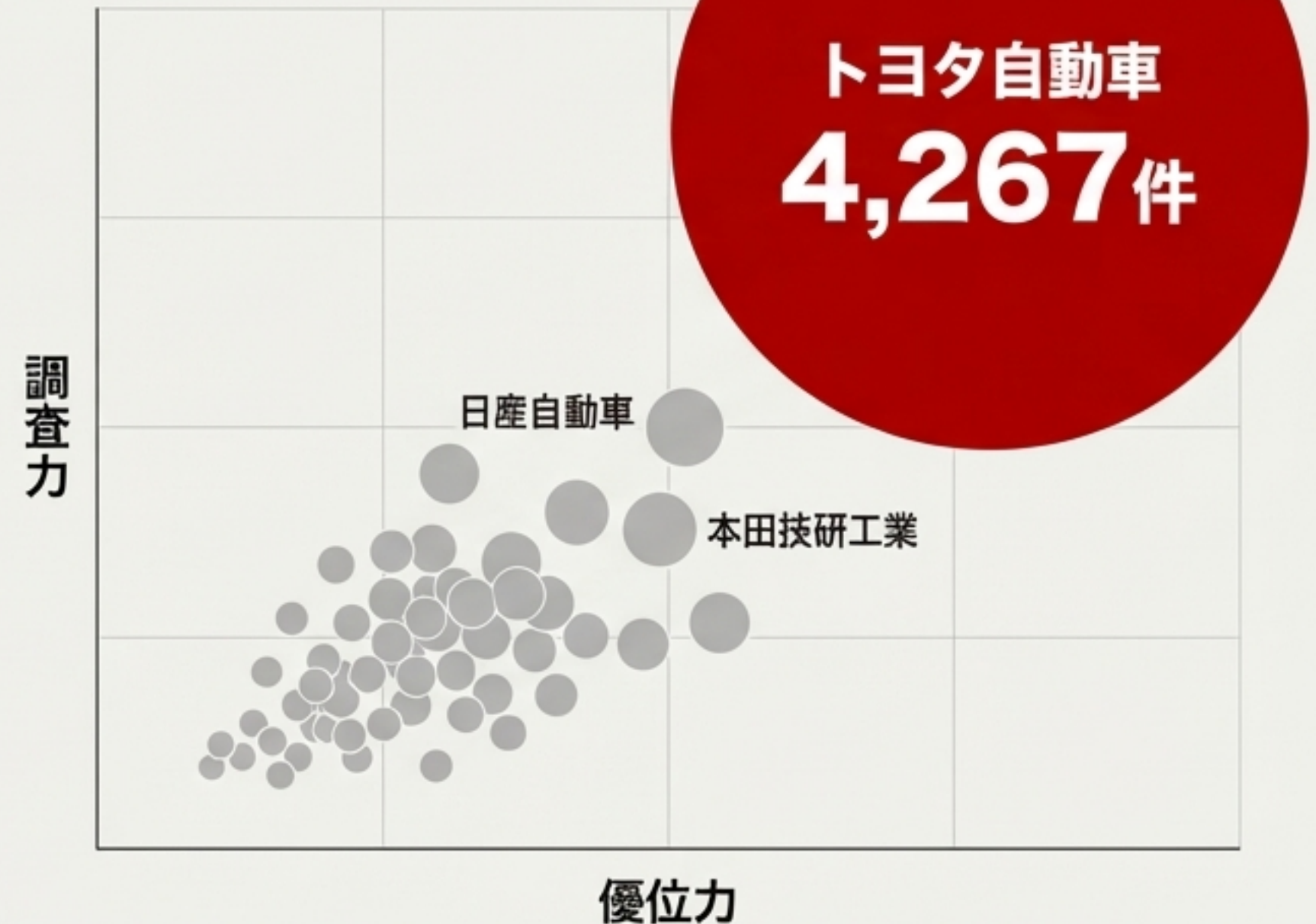


競合が恐れ、模倣し、そして政治まで動かした「プリウスの牙城」。

トヨタはハイブリッド技術に関する数千件の特許で、他社が追随できない巨大な「技術の壁」を築き上げた。

この圧倒的な優位性に対し、技術で追いつけない欧州メーカーは政治的に対抗。EUではハイブリッド車を優遇対象から外す「HV締め出し」の動きが加速した。

これはプリウスの敗北ではなく、むしろその影響力の大きさを証明する最大の賛辞と言える。競合は、ルールを変えなければ勝てないほどプリウスを恐れたのだ。



「プリウスに乗る」ということ。それは、一つの**意思表示**になった。



プリウスは、自動車史上、フォード・モデルTに次いで真に「革新的」な車と評価される。それは単なる工業製品ではなく、文化的な象徴となった。

環境に配慮したライフスタイルを送ることの表明であり、ハリウッドのセレブリティや意識の高い層がこぞって選んだことで、「エコ=クール」という価値観を世界に広めた。

プリウスは「賢い選択」の代名詞となり、新しい時代のステータスシンボルとなった。

「プリウスミサイル」—— 絶大な普及率がもたらした、 社会課題とトヨタの応答。

圧倒的な販売台数は、必然的に事故報道で目にする機会を増やした。
特に高齢者層からの高い支持と、2代目以降の独特なシフトレバー操作が、
踏み間違い事故の懸念と結びついた。

この社会現象に対し、トヨタは真摯に向き合った。

- 対策1：踏み間違いを検知し加速を抑制する「急アクセル時加速抑制機能」を開発・導入。
- 対策2：2022年発表の5代目では、シフトレバーを一般的な形式に変更し、誤操作のリスクを低減。

これは、問題から目を背けず、改善を続けるトヨタの姿勢そのものである。



プリウスはゴールではなかった。すべての「電動化」の始まりだった。



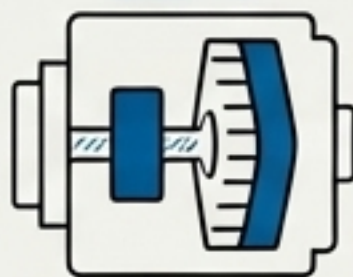
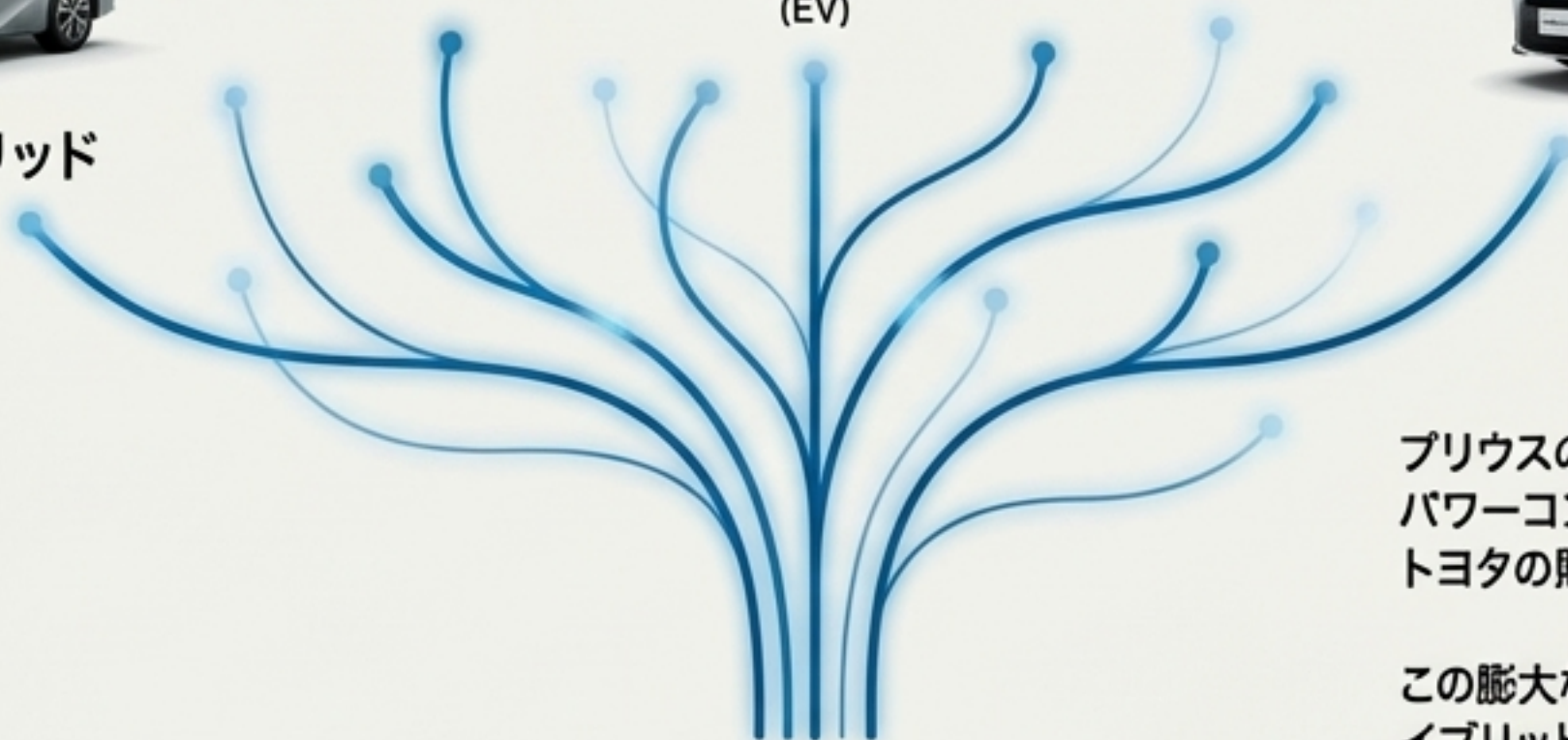
プラグインハイブリッド
(PHEV)



電気自動車
(EV)



燃料電池車
(FCV)



トヨタ・ハイブリッド・システム

Hiragino Kaku Gothic ProN W3

プリウスの開発で培われたモーター、バッテリー、パワーコントロールユニットなどの電動化コア技術は、トヨタの財産となった。

この膨大な知見と技術があったからこそ、プラグインハイブリッド (PHV)、電気自動車 (EV)、そして水素で走る燃料電池車「MIRAI」のような、次世代の電動車を開発することができた。

プリウスは、ハイブリッドという一つの答えであると同時に、自動車産業全体の電動化という、より大きな未来への出発点だったのである。

「できることをやるのではなく、 やるべきことをやる」

この言葉は、初代プリウス開発の指針であり、トヨタのチャレンジ精神を象徴する。
社長 豊田章男は語る：「私たちの行く道は、前例のない道であり、自分たちで切り拓いていく道です。私たちは失敗を恐れず、勇気を持って、バッテリーボックスに立ち続けます」
プリウスの成功は、単なる技術的勝利ではない。「もっといいクルマづくり」という終わらない旅を続ける、トヨタの企業哲学の結晶である。

豊田章男

結論：プリウスが成し遂げた、4つの歴史的偉業。



1. 市場の創造 (Market Creation)

「ハイブリッド」という巨大な自動車市場をゼロから創り出した。



2. 技術の証明 (Technological Proof)

クルマの電動化が絵空事ではないと世界に証明し、その後の全ての電動化への道を拓いた。



3. 意識の変革 (Changed Consciousness)

「クルマを選ぶことは、環境への意思表示である」という新しい価値観をグローバルに浸透させた。



4. 産業の進化 (Industrial Evolution)

圧倒的な技術力と市場支配力で、世界中の自動車メーカーを電動化の競争へと突き動かした。

PRIUS. TO GO BEFORE.

プリウスが拓いた道は、未来へ続く。

